

ジョージ・M・フレドリクソン著、李孝徳訳

『人種主義の歴史』

みすず書房 二〇〇九年二月

本書は、George Marsh Fredrickson, *Racism: A Short History*, Princeton: Princeton University Press, 2002の全訳である。著者のフレドリクソンはアメリカの歴史学者で、アメリカ合州国と南アフリカでの人種問題の比較史を専門としている。主にヨーロッパとアメリカ合州国、南アフリカでの人種主義の歴史を扱った本書でも、様々な地域や時代を、あるテーマのもとに概観・検討して立体的に歴史を叙述するフレドリクソンの研究方法が十全に生かされている。

本書の目的としてフレドリクソンが挙げているのは、「人種主義が中世から現在にかけて台頭し、衰退する（残念なことにまだ消滅してはいない）物語を簡潔な方法で示すこと」であり、そのために「人種主義」という語そのものに正確な定義を与えることを試みたという。その定義とは、人種主義は永続的なヒエラルキーと信じられるような「人種秩序」の確立を目的とするものとしてあり、その意味で人種主義は人間社会に所与のものではなく、普遍的なものでもなければ近代科学に基づく理論でもないとするものである（この意味で、フレドリクソンによれ

ば「ほとんど普遍的な人間の欠点」である「外国人嫌悪^{ゼノフォビア}」は、人種主義の出発点ではあるとしても、人種主義とは違うものとして区別される）。また、上記の目的のため、その研究の範囲を、資料による遡及可能性、世界的影響力の大きさ、それに人種主義が機能するなかで反人種主義が形成された地域であるということを理由として、「ヨーロッパ」と一五世紀以降の植民地の拡大に限定している。

本書の描く物語は、概ね以下のようなものである。まず第一章では、中世ヨーロッパでのユダヤ教徒に対する不寛容と、大航海時代からルネサンス期での人種主義の萌芽との連続性が扱われる。そこで主な考察対象となるのは、最初に植民地支配を行なった大規模な国家としてのスペインである。第二章では、一八〇一―一九世紀に被抑圧者の「解放」に呼応して出現した近代的人種主義イデオロギーについて、アメリカ合州国の反黒人主義と、ドイツの人種的な反セム主義の台頭を比較する。そして第三章では、二〇世紀に出現した、フレドリクソンが「明示的人種主義体制」と呼ぶ三つの政体（ジム・クロウ法時代の米国南部、ナチス・ドイツ、アパルトヘイト下の南アフリカ）の台頭と失墜を、世界的文脈で検討する。最後に、エピソードで二一世紀における人種主義の今後、特にグローバリゼーションと人種主義の再生産について述べ、本書を締めくくる。さらに、「補遺」として、一九二〇年代以来の「人種主義」概念がたどつた来歴を、歴史的に検討している。

以上がこの本のおおよその内容であるが、こうして「西洋に現われた最も名高い二つの人種主義」である反セム主義と白人至上主義の、過去六世紀にわたる発展過程を幅広く比較し、概

略史をコンパクトかつ明解に叙述しえた点を、本書の第一の意義として挙げることができるだろう。しかし、「訳者解説」にもあるとおり、研究範囲の同定過程において顕著であるような、フレドリクソン自身の「オクシデンタリズム」の見え隠れする部分が散見されることも、同時に指摘しておく必要がある。具体的には、平等主義や反人種主義が「西洋」で生まれたものとして論じられ、非「西洋」の側からの反人種主義運動の歴史やその主体性が見えにくくなってしまう点、アメリカ合州国や南アフリカの白人が「ヨーロッパ」や「西洋」の延長として論じられてしまっている点などである。また「同化」の問題について、一定の留保はしながらも、人種主義とは言えないとしている点も、「オクシデンタリズム」の反映した部分ということができらるだろう。いかに排他的でないものであれ、同化（本書中では主にキリスト教／「西洋」社会への同化が想定されている）とは常に一方的な暴力を伴うものであり、同化する側とさせられる側との間にヒエラルキーを築こうとするものであるのに変わりはないだろう。

このような問題点に対して、「日本の人種主義を見すえて」という副題のついた「訳者解説」では本書の内容を補うような形で補論が試みられている。そこでは、フレドリクソンの比較史の射程をさらに広げるものとして、「地政学的な意味での『日本』を想定し、被差別部落の人々、アイヌや琉球の人々、台湾や朝鮮をはじめとする植民地出身者とその子孫に対する差別、植民地に対する苛烈な同化主義政策である皇民化政策など、日本のなかで機能した様々な人種主義のあり方が検討されている。このうち特に皇民化政策について、フレドリクソンが

肯定的に想定しているところの「同化」との質的違いを明らかにしながら、その根底にある人種主義的な側面を鮮やかに浮かび上がらせている。また、本文中に日本の人種主義を考える上での参照文献が随時示されており、優れたブック・ガイドともなっている。

フレドリクソンは、「人種主義」という用語を様々な事象に応用することについて、「西洋のイデオロギー的人種主義が持つ特殊な特徴」を見定めていくようになるとして、これを警戒している。しかし、上に見た訳者補論のように、本書のなかで歴史的に抽出された「人種主義」概念を踏まえながら、「西洋」とは別の立ち位置から過去や現在の様々な問題にこれを応用していくことは可能であろうし、そうすることで問題がより明らかになることもあるだろう。パレスチナでの紛争や、二〇〇一年のいわゆる「九・一一」に端を発する「アラブ・フォビア」（あるいは「イスラモフォビア」と呼ばれる差別、またグローバリゼーションの進展によって周縁化された人々のあいだで醸成される排外主義など、人種主義的状况は現在も無くなっていない。こうした状況に対抗し、意識的に向かい合うためにも、本書の提示する人種主義の歴史と、歴史的な構築物であり、それゆえに変更あるいは廃絶可能なものとしての人種主義概念は重要性を持っているといえる。人種主義の歴史を学ぶ簡潔な入門書としても、世界各地の様々な人種主義的状况を考える上でのツールとしても、重要な基礎文献となることだろう。

（相川拓也）